慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて
Sub Title	Etude de la polysémie de la particule casuelle DE en japonais contemporain
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Itō, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.51 (2019.) ,p.105- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20191231-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における
格助詞「で」の多義性の理解に向けて

芦野　文武*
伊藤　達也**

1.　導入

日本語の格助詞「で」は様々な意味・用法を持つ多義的な言語的アイテムである。「で」に意味をいくつ認めるかはそれぞれの研究によって異なるが[1]，例えば，日本語記述文法研究会[2]（編）（2009：104–106）は，「で」の格の意味として 8 つを挙げ，16 の用法を区別している[3]。

〈日文研による「で」の分類〉

格の意味	用法の詳細	例文
主体	動きの主体	(1)　私と佐藤でその問題に取り組んだ。
場所	動きの場所	(2)　庭で犬が吠えている。
手段	道具	(3)　ナイフでチーズを切る。
	方法	(4)　遠近法で図を描く。
	材料	(5)　千代紙で鶴を折る。
	構成要素	(6)　委員会は 5 人のメンバーで構成されている。
	内容物	(7)　会場が人でいっぱいになる。
	付着物	(8)　服がホコリで汚れる。
起因・根拠	変化の原因	(9)　強い風で看板が倒れた。
	行動の理由	(10)　急用で家に帰った。
	感情・感覚の起因	(11)　友人とのことで悩んでいる。
	判断の根拠	(12)　隣の部屋の人物が誰なのか，甲高い声で分かった。
限界	範囲の上限	(13)　先着 30 名で締め切る。
領域	評価の成り立つ領域	(14)　富士山が日本で最も高い山だ。
目的	動作の目的	(15)　観光で京都を訪れた。
様態	動きの様態	(16)　裸足で歩く。

*慶應義塾大学文学部仏文学専攻　**名古屋外国語大学外国語学部フランス語科

1)　先行研究，辞書などによる「で」の意味・用法の分類に関しては盤若（2015）が参考になる。

2)　以下，「日文研」と略記する。

3)　この表は，日文研の格助詞の意味ごとのリストを，筆者が「で」に限ってまとめ直したものである。

「で」の意味・用法に関しては，これまで様々な研究がなされており，その個々の用法に注目した研究や他の格助詞との比較を行った研究がある一方，その包括的機能を捉えようとする研究も複数存在する。後者は大きく2種類の仮説に分けることができる。第1の仮説は，「で」の機能を「範囲や領域の限定」とする森田（1989）の立場であり，「で」によって限定されるNPの性質に従い5つの分類を提案している（「場所」「時間・時点」「数量」「人間」「事物」）。同じく，田中・松本（1997）も，xデを「xを対象限定せよという操作を要請する」と特徴づけているが，限定の仕方として「領域限定」と「モノ限定」を区別する点が森田とは異なる。第2の仮説を提案している研究として，菅井（2007）や森山（2008）などの認知言語学のアプローチからの研究がある。前者は，「で」を「前景的なガ格やヲ格の背景的側面の提示」と特徴づけている。後者は，「場所」用法が「で」のすべての用法のプロトタイプであり，それをもとに「空間的背景」と「道具・手段」のプロトタイプから，様々な認知プロセスを経て他の用法をプロトタイプからの「拡張」とみることで「で」の多義性を包括的に捉えようと試みている[4)]。また，これら2つの仮説に批判的な最近の研究として盤若（2015）があり，「で」の包括的意味機能として「述部で表されている行為や変化や事態や状態を成立させるという機能を表す」という新たな仮説を結論部で提案している。

本稿は，先行するこれらの仮説を統合しつつ，「で」の多義性を包括的に捉えることを可能にするような新たなアプローチを提案し，それを元に，「で」に先立つタームと述語との間の関係づけの違いから，どのように「で」の個々の意味が構築されるかを明らかにすることを目的とする[5)]。

したがって本稿では，「で」は「（活動が行われる）場所」を意味するという直観から出発しない。「場所」の概念は，出現する文脈から切り離された「で」に関連づけられた「語彙としての意味」でしかないからである。本論は個々の語彙・文法アイテムの意味的同一性（identité sémantique）は，それぞれのアイテムの文脈による変化（variation）を通じてのみ把握できる，という立場に基づき，文脈（発話）によって様々に変化する「で」の意味を通じて把握しうる「規則性」（régularité）を，「で」の意味的同一性として再構成しようとする試み

4） 室町時代から現代までの口語資料に基づく通時的研究を行った間淵（2000）では，「で」の基幹的用法を，場所格・手段格・様態格とし，近世以降に発達した動作主格や原因格を，基幹的用法から通時的に派生した用法とみる。著者はこのデ格の発達を，文構造における周辺的・付加的な要素から中心的・必須的要素への参入と考えている。

5） 本稿では，多義性の把握に関して，認知言語学におけるプロトタイプ理論に見られるような，中心的な意味から出発してそれ以外の意味を「派生」や「拡張」によって記述する方法を取らない。この点では，「で」の様々な意味の間に中心／周辺のヒエラルキーを設けない。「で」は，個々の意味を起越した意味的同一性（本稿の仮説にあたる）を持っており，個々の意味は「で」が出現する文脈において構築されるものという限りにおいて同等であると考える。（理論的枠組については，Culioli（1990）（1999）（2018），伊藤（2006），Ashino, Franckel & Paillard（2017）を参照。）

である（それは「で」の「中心的」な意味にも，「具体的」な意味にも相当しない）。同時に，「で」の文脈による様々な意味の変化は偶発的なものではなく，一定の規則性（variation régulée）によって組織されるという立場をとり，それを「で」の3つのケースとして提案する。

2. 仮説

「で」に先立つタームをX，述語をpとし，「で」の仮説を次のように定義する。

「で」は，Xを述語pによって表される事象の実現を媒介するタームであるとマークする。

以下，この仮説についていくつかコメントと補足を加える。

—「Xがpで表される事象の実現を媒介するタームである」は，Xそれ自体は事象を構成する行為の対象や目的にはならず，事象に対して外的な関係しか持たないこと，と定義する。つまり，Xは，「それによって／それを介して／それを元にして」，pで表される事象と関連づけられるという意味である。

—Xのステータスは，pによって表される事象の実現と関連付けられることによってのみ決定される[6)]。

—述語pの補語であるガ格またはヲ格によって標示される名詞句をYとする。以下，必要な場合はY–pと表記する。どの名詞句がYと解釈されるかは発話によって異なる。「太郎がナイフで肉を切る」や「太郎が遺体で見つかった」においては，Yはガ格に置かれた「太郎」にあたり，「太郎がおつりを100円玉でもらう」，「太郎がベビーリーフでサラダを作る」などの発話においては，Yはヲ格に相当する名詞句（それぞれ「おつり」，「サラダ」）にあたると考える。以下，必要な場合は何がYにあたるのかを示す。

—「で」が現れるすべての発話において，Xがpで表される事象の実現を媒介するタームであるということは共通しているが，それをどのように解釈するかは，Xがpにどのように関係

6） 菅井（2007：24）が正しく指摘するように，Xの意味解釈にとっては，Xに相当する名詞の語彙的性質だけでなく，Xと他の格成分や述語との関連を考慮することが重要である。例えば，次の例文は，同じX（木の枝）が，pとの関係によって，a.「道具」，b.「材料」，c.「原因」と様々な解釈を持ちうることを示している。

木の枝で　{a. 地面に小さな穴を掘ってください。b. 即席の白旗を作った。c. 指に怪我をした}。（菅井：*ibid.*）

菅井の指摘を本稿の枠組みで解釈すれば，「で」でマークされるX「木の枝」はそれ自体では「道具」や「材料」などとはみなすことができず，pで表される事象の実現のどのような「媒介」となっているかによって初めてその解釈が決定されると言える。

づけられるか（Xがどのような意味でpに対して媒介なのか）によって大きく異なる。本稿では，XとpのPの間の関係づけの仕方に従って，次の「で」の3つのケースを区別することを提案する。

Ⅰ．構築の「で」：Xが元になり，pをXの結果・続きとして生ずる事象として構築する。（cf. 3）
Ⅱ．特定化の「で」：Xは，pの実現の仕方を特定化する。（cf. 4）
Ⅲ．補完の「で」：Xが，完結性・充足性をその意味として内包するpを補完する。（cf. 5）

以下，Ⅰ～Ⅲを順に検討し，「で」の個々の意味が，様々な文脈における，Xの「媒介性」の特殊な実現として記述できることを示す。

3. 構築（construction）の「で」

この最初のケースでは，「で」の機能を，「XがpをPの結果・続きとして生ずる事象として構築する。（その場合，XはPの実現のトリガーである）」と考える。つまり，XがPの実現を媒介するタームであるということを，Xが元になってPが生じる／Xが元になってPが引き起こされること，と解釈するのである。冒頭の「で」の意味・用法リストのうち，「起因・根拠」および「目的」用法がこの枠組みで記述できると考える。また，当該のリストにはないが，「で」が「条件」を表す用法もこのケースとして取りあげる。これらの「で」の用法は，XがPを構築するというメカニズムを共通して持つが，Xのステータス，およびXとPの間の関係はすべて同じではない。以下，3つのタイプを区別する。

3.1. PはXに続く事象（原因・理由，判断の基準）

次の例文において，「で」は（17）-（18）では「原因」，（19）-（20）では「条件」を表すと考えられる。XとYはそれぞれ独立した事象と解釈できる。

（17）台風で家の屋根が飛んだ。
（18）友人とのことで悩んでいる。
（19）新規登録で，もれなくプレゼントがもらえます。
（20）今場所の優勝で，太郎の横綱昇進が決まる。

ここでは，どのような条件が揃えば原因や条件という解釈が生ずるのかを考えてみたい。まず両者とも，Xが元になり，pがXの結果・続きと解釈される必要がある。もう一つの共通点は，どちらの用法でも，主体の介在がなく，X，pという2つの事象が連続して生起するとみなさ

れるということである[7]。実際，主体の意志が表われる以下の発話では，Xは原因とも条件ともみなされず，いわゆる「手段」としか解釈できない[8]。

(21)　風邪で学校を休もう[9]。
(22)　新規登録で，プレゼントをもらおう。

それでは，どのような点で「原因」と「条件」は区別できるのであろうか？　それはXのステータスの違いによると考えられる。つまり，Xを「原因」と解釈するためにはXが既に実現していなければならず，「条件」と解釈するためには，逆にXが未実現である必要があると言える[10]。

次に，日文研のリストで「判断の基準」と呼ばれている用法を考えてみよう。

(23)　ラケットの持ち方で，太郎は相手が素人だと分かった。
(24)　焦げた臭いで，太郎は火事だと気づいた。

ここでは，Xが元になり，その結果・続きとしてpを構築するというメカニズムは，Xが基準となり，pで表される「判断」を行うことと解釈できる。この用法の特徴は2つある。1つ目は，pが「分かる」や「気づく」などの主体の認識を表す動詞に相当することであり，2つ目は，Xが主体と結びつけられて解釈されるということである。例えば，(23) においては，X「ラケットの持ち方」を主体（＝太郎）が視覚を通じて観察することと考えられる。その意味でXは単に「相手のラケットの持ち方」ではなく，主体の観察を含む「相手のラケットの持ち方を見ること」と考えられる。Xは，p（太郎が相手を素人と判断する）という認識・判断

7)　この機能は接続詞の「で」の意味機能と共通性があると思われる。
8)　また，「条件」用法で，しばしばpが「もらえる」などの可能形や「決まる」などの自動詞に相当することも，この用法において主体の意志が介在しないことを裏付けているといえよう。
9)　この例が可能になるためには，Xが「口実」と解釈される必要があり，従って「病気」は「仮病」と解釈されなければならない。
10)「5足す5で10になる。」「牛丼の並とみそ汁セットで480円になります。」のような例文でのXは，一般的な意味ではpの「原因」や「条件」とは解釈できないが，Xがpという帰結の元になっているという意味では「原因」・「条件」と同じく，3.1.に分類できると考えられる。この場合は，pはXの論理的帰結である。さらに，「食事の後でコーヒーを飲む」もこのケースとして分類できると思われる。この場合は「で」は「に」と交替できるが，「食事の前{*で/に}コーヒーを飲む」では，「で」が使えない。これは，pを構築するXはpに先立って成立していなければならないのに，「前」がX（食事をすること）がまだ成立していないことを表すため，矛盾が生じることから説明できると思われる。

に至る元であると考えられる。(24) では，Xは「太郎が焦げた臭いをかぐこと」であり，嗅覚が問題になっている。

以上の「原因」,「条件」,「判断の基準」の3つの用法においては，XとpがそれぞれX独立した事象と解釈できるため，Xが先に生じ，pが後に続くという時間的順序が想定できるという共通点がある。

3.2. pはXの発現・兆候（manifestation）（原因）

(25) 太郎は癖で爪を噛んでしまう。

(26) 太郎は惰性でテレビを3時間も見てしまった。

(27) 太郎は病気で熱がある。

これらの例は，Xが元になってpが成立するという関係を表すという点で，3.1. で扱った発話と類似しているが，Xのステータス，および，XとpのX関係において異なる。ここでは，Xは，広い意味で，主体の「特性」を表していると解釈でき，pがその「発現」や「兆候」に相当すると解釈できる。というのも，Xにあたる「癖」,「惰性」,「病気」はそれ自体では具体的な形を持たず，主体（Y＝太郎）にそれが発現したり，兆候が表れたりすることを通じてのみ把握されると考えられるからである。例えば，(25) の「癖」は，主体「太郎」において「爪を噛んでしまう」という行為が生ずることを通じてしか捉えることができない。その意味で，3.1. の発話と異なり，XとpはX2つの別々の事象ではなく，Xは主体の特性，Yはその発現・兆候と考えられ，Xとpの時間的順序は問うことができない[11]。

3.3. pはXの現動化（actualisation）（目的）

(28) 太郎は｛観光／出張／仕事／研究／修学旅行／休暇｝で京都へ行った。

(29) 太郎は学校の宿題でジュースを作った。（菅井 1997：24）

(30) 太郎は趣味で釣りをしている。

これらの例は，冒頭のリストにおいて「で」が「目的」を表すとされているが，本稿では，ここでも，「で」は，Xが元になり，pをその結果・続きとして捉えていると考える。Xは何ら

---

11) 「渇水でダムの水位が下がっている」,「梅雨で毎日雨が降っている」のような発話の解釈は曖昧である。XとpをX別々の事象として捉えることも可能であるし，XとpはX別々の事象ではなく，pはXの「発現・兆候」と考えることも不可能ではない。後者の場合，Xは主体の特性ではなく，自然現象に相当するという意味で3.2. で扱った発話とは異なると言える。なお，これらの例文における「で」は，判定詞「だ」の連用形と捉えることも不可能ではないが，本稿の枠組みではこの違いについては言及しない。

かの「予定・計画」と考えられ，p は何らかの予定や計画の実現[12] であるとみなすことができる。p を X の実現とみなすという点からは，3.2. と似ているが，3.2. では X は主体の「特性」と解釈されるのに対し，ここでは X は「予定・計画」と解釈される点に違いがある。

3.4. まとめ

以上，「で」の第 1 の機能として，「X が p をその結果・続きとして生ずる事象として構築する」ケースを見た。X と p のそれぞれのステータスおよび X と p の関係の違いにより，次の 3 つを区別した：X と p は 2 つの区別された事象であり，p が X に続く事象と解釈される場合（3.1）；p が特性 X の発現・兆候と解釈される場合（3.2）；p が予定・計画 X の現動化（3.3）である場合。また，「原因・理由」，「判断の基準」，「目的」とされる用法が，これらいずれかのケースとして分析されうることも示した。

4. 特定化（spécification）の「で」

この第 2 のケースでは，「で」の機能を，「X が p の実現の仕方を特定化する」と定義する。つまり，X がどのように p が実現したかを特定するという意味で，p に対して媒介となると考えるのである[13]。第 1 のケースでは，X を元にその結果・続きとして「何が起こったのか」という，p の構築が問題になっていたのに対し，ここでは，いわば，p を元に，それが「どのように起こったのか」という，p の質的限定が問題になっていると言える。また，第 1 のケースでは，X が事象や特性に相当する NP であったのに対し，ここでは，X が広義の「モノ」や「人」に相当するという違いもある。冒頭のリストのうち，「道具」，「手段」，「材料」，「様態」，「動きの主体」の用法がこのケースとして分析できると考える。これらのいずれの用法でも，X は Y–p 全体を特定すると考えるが，X が特に Y–p のどちらの構成要素を特定化するかによって 3 つの場合を区別し，この違いによって用法を区別することを試みる。以下，順に 4.1. X が p を特定化する，4.2. X が Y を特定化する，4.3. X が Y–p 全体を特定化する，ケースを見ていく。

12） 予定や計画はそれ自体としてはヴァーチャルな存在であり，何らかの形をとって実現（現動化）される必要がある。

13） 4.の「で」の機能において重要なのは，XがY-pを特定化するということであるが，特定化という概念は，pを質的に限定する可能性を持ったタームのクラスから選ばれたものでなければならないということを意味する。したがって，？足で歩くが奇妙なのは，「歩く」ことにおいて足は必然的に関与するため使えず，（自分の足・片足・急ぎ足）で歩く，のように「歩く」を質的に限定（特定化）する必要があるのである。

4.1. X は p を特定化する（道具・手段）

(31)　太郎がバスで学校に行く。

(32)　太郎がナイフでチーズを切る。

日文研のリストでは，(31) と (32) はそれぞれ，「手段」と「道具」という用法に相当する。本稿では，X（バス／ナイフ）は，Y–p のうち，特に p（行く／切る）を特定化すると考える。というのは，X は移動手段や道具として，p を行う，という関係が想定できるからである。つまり，(31) と (32) では，それぞれ，「バスが行く」，「ナイフが切る」，というパラフレーズが可能である。

4.2. X は Y を特定化する

4.2.1. Y はヲ格の名詞句（対象の特定化：材料・様態）

ここで扱う例は，X は，Y–p のうち，特に Y（対象）を特定化すると考える。発話によって，Y はヲ格で標示された名詞句，またはガ格で標示された名詞句を特定化する。

以下の発話では，X が特定化する Y はヲ格で標示されていると考える。

(33)　太郎がベビーリーフでサラダを作った。

(34)　太郎が丸太でカヌーを作った。（菅井 1997：35，一部変更）

(35)　太郎が折り紙で鶴を折る。

(36)　太郎がおつりを 100 円玉でもらうよう頼んだ。

(37)　太郎がコーヒーを M サイズで注文した。

(33)～(35) に現れる動詞「作る」や「折る」はいわゆる「製造動詞」であり，ヲ格で表示された名詞句が p を表示される行為の結果としての，広い意味での「製造物」であると解釈できる。X が Y を特定化するというのは，Y が何によってできているのか，ということを限定していると考えられる。つまり，X は Y の製造に関与するモノという意味で，「材料」である。それに対して，(36)～(37) では，X が「もらう」や「注文する」の対象である Y がどのような「あり方」をしているのかを特定化していると解釈できる（＝「様態」）。(36) では，X（100 円玉）は Y（おつり）のあり方を指定し，(37) では X（M サイズ）は，Y（コーヒー）のサイズを指定している。

以上，X がヲ格で表される Y を特定化すると考えられる例について，2 つのタイプを区別したが，どちらのタイプも「X の Y」で言い換えられることが共通している。cf.「ベビーリーフのサラダ」，「M サイズのコーヒー」。

4.2.2.　Y はガ格の名詞句（1）（主体の特定化：様態）

上記の例とは異なり，次の例では，X が特定化する Y がガ格で表されていると考えられる。その意味で，Y は行為の「主体」と考えられ，X は主体 Y が p で表される行為を行う様態を表していると言える[14]。

(38)　花子が｛裸足／サンダル／ハイヒール｝で歩く。
(39)　花子が｛笑顔／知らん顔｝でそう答えた。
(40)　太郎たちが｛3 人／全員｝でカラオケに行った。

（38）では，X は Y（太郎）が p（歩く）をどのような様態で行ったのかを特定化している。言い換えれば，X は，Y が p を実現する際の主体の在り方（裸足である，サンダル／ハイヒールを履いている）を述べている。同じく，（39）と（40）でも X は主体 Y がどのような様態（表情／人数）において p を実現したのかを特定化している[15]。これらの例では，意味的に Y は能動文の動作主体であるが，次のように Y は受動文の被動作主である場合もある。

(41)　行方不明の男性が遺体で発見された。（菅井 1997：34）

X（遺体）は，p（発見する）の対象である主体 Y の状態を表していると言える。以上の例は，ほとんどの場合，「Y は X である」という言い換えが成り立つということを共通点として持つ[16]。

4.2.3.　Y はガ格の名詞句（2）（主体の特定化：動きの主体）

次のような例では，「で」が「動きの主体」を表すと考えられている。

(42)　佐藤と私でその問題に取り組んだ。
(43)　警察で今それを調べている。

14）　本稿では扱わないが，「A は B である」や「A は B でいる」もこのケースとして記述できると思われる。「である」を「で」と「ある」から捉えた分析については cf. Dhorne（1984）

15）　次に見る「動きの主体」の「で」もここでの「様態」の「で」も，Y（＝主体）の特定化という点では共通しているが，（40）では p は解決すべき事態ではなく，単なる出来事である点が大きく異なっている。「X で」において X が人であり p が解決すべき事態である場合に限って X は動作主として特定化される。

16）　菅井（1997：34）は，「意味役割［様態］の場合は，（…）「ガ格」や「ヲ格」が「デ格」と広義の同定関係にあり，図式的には関数＝を使って，【ガ格＝デ格】あるいは【ヲ格＝デ格】と表記することができる」と述べている。

日文研（2009：36）はこのような「で」の用法を「述語で表される事態に対処する組織としてとらえられた主体」と定義する。本稿ではこのケースも，X は p がどのように実現したかを特定化すると分析できると考える。

このような用法の「で」が現れることができる文脈を観察してみるといくつかの特徴があることが分かる。

① X とは別の名詞句，もしくは主体に準じる名詞句が現れる（これを X' と表示する）。

(44) 救急車が到着する前に，私達でできることがあります。
(45) スタッフが 5 人もいらっしゃいましたが片づける様子も全くないので，私達で処理しました。（https://www.tripadvisor.jp/）

② 述語が「くれる」,「もらう」などの受益表現で表されることが多い。

(46) 残りは学生部の方でやってくれるそうだ。
(47) この荷物をしばらく，君のところで預かってくれないか。

まず，①について，X と X' の関係を考えてみよう。(44) で，X（私達）と X'（救急車，つまり救急隊員）それぞれが述語に対してどのような関係を持っているかを考えると，p で表される事象（病人やけが人の手当をすること）を行う動作主は本来 X' と考えられるが，それを X が行った，と解釈できる。(45) においても，p（処理する）のは本来 X'（スタッフ）の仕事であるところを，X がそれを行ったと解釈できる。ここからわかることは，X が X' の代わりに p を行う動作主体として解釈されるということ，つまり X に相当する名詞句が X' の代替動作主として解釈されるということである。

次に②について考えるが，まず，ここでも同じく，X が X' の代替動作主と解釈されていることが確認できる。(46) では，X'（私）が X（学生部）と何か共同作業を行っていて，残りを X が引き受けることになったというような状況が想定できる（cf.「残りは」)。この意味で X は X' の代わりに p を行う動作主体と解釈できる。(47) では，p は「預かる」であるが，それが表す事象とは，まさに，「他人に代わって何かを持つ」，という代替を意味するのであり，ここでも X が X' の代わりに何かを行うという理解が可能である。では，X が X' の代替動作主であることと，「くれる」のような受益表現にはどのような関係があるのだろうか？それは，X が X' の代わりに p を遂行するということが，X' の利益であることを示すことに他ならない。

以下のように，X が人間が集まったものとしての組織を表している時も，X が代替動作主と解釈されることは変わらない。

(48)　旅費は大学で払ってくれるそうだ。

(49)　税金は会社で払ってくれてるけど，退職したらどうなるの？
　　(https://type.jp/s/caretopi/money/20131125.html)

ところで，次のような例はどのように考えればいいのだろうか？

(50)　宿題をしている子供を家に残して，カミさんと私でコーヒを飲みに行きました。

pで表されている事象（コーヒーを飲みに行くこと）は，ア・プリオリには何らかの問題への対処とは考えにくく，そのうえ，X（カミさんと私）がX'（子供）の代わりにコーヒ―を飲みに行くと解釈するのは難しいように思われる。しかし，このような例もいままでの原則で説明することが可能である。この発話の発話状況を考えてみると，私・カミさん・子供の3人が一緒に「コーヒーを飲みに行く」という予定だったが，何らかの事情（例えば，子供が宿題をしていること）によって，子供は参加しなかった，というような状況が想定できる。つまり，ここで問題になっているのは，pへの実際の参加者（X）が当初のpへの参加予定者（X'）とは異なるということであり，この意味で，X'の代わりにXがpの動作主になるというメカニズムは共通していると言える。なお，「カミさんと私」が喫茶店に行ったということが，何らかの問題に対する対処と解釈できるとすれば，それは，子供が同伴しないという状況を受け入れること，と考えられるのではないだろうか。

次の例も，ア・プリオリにはXがX'の代替動作主とは考えにくい例であるが，「で」が使われている。

(51)　警察でそれを今調べている[17]。

(51)が少し特殊なケースであるのは，X（警察）はアプリオリには，事件が起きた場合に調査の権限を与えられている組織であるため，今までと異なり，pの実現に媒介となる別の動作主X'が想定しにくいからであるとも考えられるが，この場合でも，潜在的動作主として例えば，事件の当事者がX'として想定できると考えたい[18]。

---

17)　Xが「組織」に相当するこのような文は,「場所」用法からの派生と分析されることが多い。例えば，森山（2008：174）は,「〈動作主用法〉は，メトニミー的拡張により，動作の行われる場所を「参照点（reference point)」として，最終的にはその場所と密接な関わりを持つ動作主に意識を向けさせるもの」と分析する。

18)「私の方でこれを変更することはできかねます」などの例文では，逆にXが何かをする権限を与えられていず，権限を持つX'の代替動作主としては解釈できないということを表している。

まとめると，当該の用法の「で」は，X’とXからできるクラスが与えられ，X’の代わりにXがpの「媒介的」動作主として選択されることをマークすると言える。

4.3. XはY–p全体を特定化する（「場所」，「領域」，「時間」）

ここで扱う例は，XがY–p全体をブロックとして特定化し，XはY–pの実現の枠組みを限定していると考えられる。

4.3.1. 「場所」

ここでは，XはY–pがどこで実現したかを特定化すると考えられる。しかし，周知のように，「で」によって標示される場所（X）は「行為・出来事」が生起する場所とされ，「モノや人の存在」を標示するとされる「に」との使い分けがしばしば問題になる。

(52)　太郎が公園｛*で／に｝いる。
(53)　太郎が公園｛で／*に｝｛遊んでいる／散歩している／ギターを弾いている｝。
(54)　公園｛*で／に｝トイレがある。
(55)　公園｛で／*に｝コンサートがある

しかし，なぜ「で」は「行為・出来事」の場所でなければならないのか，また，なぜモノや人の「存在」の場所になりえないのかという問いに答える必要がある[19]。これは，本稿の仮説に従うと，「で」によって標示される場所（X）は，pで表される事象の実現のために媒介となる場所，つまり，事象が実現するために「利用される」ような場所と解釈されなければならないということから説明できる。したがって，pが「行為・出来事」を表す場合は，Xがそれを実現する目的で利用されると解釈することは問題がない。例えば，(53）では，X（公園）は，太郎が遊んだり，散歩したり，ギターを弾いたりするために利用される場所と解釈できる。逆に，pが「存在」を表す場合は，XはY–pの定位点（「太郎がいる」を定位する場所）と解釈されなければならなくなる。つまり，Y–pの実現の「媒介」として定義されるはずのXが（つまり，あくまでpの実現の枠組みという意味で，Y–pの外部にあるはずのXが），pの実現の一部（内部）として解釈されてしまうため，「で」は使えないと説明できる[20]。

次の例文における「で」の制約の違いも同じ原則で説明できる。

19）菅井（2000）も，格助詞「に」についてこのような問いを立てている。

20）これは，Xがpのいわゆる「必須補語」として解釈される場合は「で」が使えない，というよく知られた統語的特性を意味論的に言い換えたものである。

(56)　東京 {*で／に} 住んでいる／泊まる。
(57)　ベンチ {*で／に} 座る。
(58)　東京で {暮らす／生活する}。
(59)　ベンチで {本を読む／昼寝する}。

(56) の「住む」や「泊まる」などの動詞は，「いる」の場合と同様，X（東京）を p が実現するために利用される媒介としての場所とは解釈できず，X を p の実現の一部と解釈させてしまうため，「で」は使えない。(57) の「座る」という動詞は，これまでの動詞と異なり，状態変化を伴う動詞であるが，全く同じ理由で「で」が使えない。それに対して，(58) の「暮らす」や「生活」するは，「住む」や「泊まる」と異なり，何らかの活動をするという意味を持つため，X をその活動が実現するために関与する場所と捉えることが可能となる。(59) では，X（ベンチ）が定位点（そこが到達点であるような場所）としての場所ではなく，利用される場所と解釈されるので可能になると考えられる[21]。

4.3.2.　X は Y–p の有効性を担保するためのターム

「で」は，次のように X が「評価の成り立つ領域」と考えられているケースでも用いることができる。

(60)　富士山は日本で一番高い山だ。

「で」が「場所」を表す用法では，p が「行為・出来事」を表し，X は p が実現するのに関与的な場所と分析されたが，ここでは Y の特性叙述が問題になっており，多くの例で p は名詞述語であるという特徴がある。ここでは，X は，叙述（Y–p）の有効性を担保する媒介であり，

21)　ただし，「ベンチ・椅子で座る」という言い方が全く不可能ではないということを指摘しておきたい。「に」に比べて遥かに少なく，容認度に多少問題がある可能性もあるが，次のような例が実際に存在する。「接待やご両家の顔合わせにも，最適な 4〜6 名用の個室。椅子で座るタイプのカウンター5 席のお部屋。」，（https://www.hotpepper.jp），「床で座っている？　椅子で座ってる？」（https://ameblo.jp/youtuuosaraba/entry-12139129018.html）これらの例が可能なのは，「で」によって標示される X（椅子）が，「座る場所」というよりも，「座り方」（cf.「タイプ」）と解釈されるためであると考えられる．つまり，X（椅子）は「どのように座るのか」という「座り方」を特定化しており，X は色々な座り方（「椅子」のほかにも「畳」，「床」など）の一つであると解釈されるためである．また，「ある女の子はどんな椅子もずり落ちてしまい，寝たきりだったが，この椅子で座ることができるようになった。」（http://www.jaot.or.jp/ot_job/sugoude/sugoude_011.html）のような例文の「で」は「構築の「で」」であり，ここでも X は p（座る）の「場所」というよりも，p が実現するためのトリガーであると考えられる。

どの範囲で p が有効であるかを限定しているという意味で，Y–p を特定化していると考えられる。逆に言えば，「で」は，Y–p がどのような範囲においても「真」なのではなく，X という範囲においてのみ有効であると規定しているのである。その意味で，「で」は Y–p を相対化しているともいえる。例えば，（60）においては，X（日本）は，Y–p（富士山は一番高い山だ）がどの範囲において成り立つのかを限定していると考えられ，Y–p の空間的・地理的な限定が問題となっている。下の例が示しているように，X は文脈によって様々なステータスをとることができる。

（61）　太郎は現時点で首位にいる。（時間・時点）
（62）　小津で一番好きな映画は『東京物語』だ。（（作品の）集合）
（63）　シロナガスクジラは最大で体長 30 メートルになる。（尺度）
（64）　この意味で，事態は深刻だ。（観点）

次のような例では，X は同じ「小学校」という名詞に相当するが，解釈が異なるように思われる。

（65）　明日は小学校で最後の運動会だ。
（66）　太郎は小学校で一番足が速い。

一見すると両方の例とも X は「空間領域」と解釈できそうに見えるが，（65）では X は「時間」（＝小学校生活），（66）では，場所でも時間でもなく，「生徒の集合」と考えられる。

以上のように，X に相当する名詞句は様々であるが，「で」が X を，Y–p の有効性を担保する媒介であると捉えることは共通している。

4.3.3. 「時間」

この節の最後に「X で」の X が，時間表現に相当する場合を考える。森田（1984：757–758）では，次の 2 つのタイプの用法が区別されている。

①　時間・期間の長さを限定する「で」
（67）　30 分で話す。

②　時点をいつと限定する「で」
（68）　10 時で寝る。

森田は「限界点」という仮説に基づき，①の「で」を「継続動作の時間的限度」，②を継続していた行為・作用・現象の「終了点」と定義しているが，正しいと思われる。以下，本稿の仮説の枠組みで森田の仮説を再解釈する。

まず，（67）と（68）の「で」の働きを考えるために，次の発話と比較してみよう。

（67’）　30 分 ϕ 話す。
（68’）　10 時に寝る。

（67’）において，助詞を伴わない「30 分」は，「話す」という行為が継続した時間の幅を表す。（83’）では，「に」によって標示された「10 時」は単に「寝る」という行為を 10 時という時間軸上の時点に定位することのみが問題になる。「で」が使われるとそれぞれ何が変わるのであろうか？

（67）では，「で」は，「話す」という行為を，「話すべきこと」との関係で捉え直すと考えられる。つまり，「話すべきこと（量）」が設定され，それを達成することが問題となる。従って，X は「話すべきことが（すべて）話される」（それ以上はもう話すべきことがなくなる）ために必要な時間と捉えられることになり，結果として，X（30 分）は，「話すべきことが話し終わる」のに費やす時間と解釈されるのである。

（68）では，「で」は，p「寝る」によって表される事象を，「床につく」というよりもむしろ，「起きて何か活動をしていること」と解釈させ，X をそれが終わる時点としてマークすると考えられる。「で」は，「起きて活動している」という事象を定位する時刻のクラスを構築し，X（10 時）を，それを越えたら事象を位置づけないような最後の時刻としてマークすると考えられる。

「時間の幅」を表そうとも，「時間軸上の時点」を表そうとも，ここでも「で」は Y–p がどのように実現するのかを特定化していると考えられる。

4.4.　まとめ

以上，「で」の機能として，X は p の実現の仕方を特定化する，という仮説を立てた。X は常に Y–p を作用域として持つが，特に p を特定化する場合（4.3.1.「手段」），特に Y を特定化する場合（4.2.「様態」，「動きの主体」），Y と p をブロックとして特定化する場合（4.3.「場所」，「領域」および「時間」）を区別した。

5.　補完（complémentation）の「で」

この最後のケースでは，「で」の機能を，「X が，（広い意味での）完結性・充足性をその意

味として内包するpを補完する」と考える。3と4で扱った「で」は，それが標示するXが述語pの意味とは独立して機能したが，この最後の節では，Xが述語pの意味とより密接に関わると思われるケースを扱う。「で」は動詞の必須補語とみなされることはないが，それでも，共起しやすい動詞があることも確かである。この節では，そのうち，「で」と結びつきやすく，広い意味で「完結性」および「充足[22]」をその意味として内包している述語をいくつか取り上げ[23]，Xがpで表される事象を終わらせたり，満たしたりするという補完（完全なものにすること）の機能を果たしていることをみる。冒頭の用法リストのうち，「構成要素」，「内容物」，「範囲の上限」がこの枠組みで記述する。

順に，5.1. pが「終了・限界」を意味するケース，5.2. pが「充足」を意味するケース，および5.3. pが「全体」を表すケースを見る。

5.1. pが「終了・限界」を意味する[24]

ここでは，終了・限界を意味すると考えられる，「締め切る」と「最後だ」について言及する。

(69)　申し込みはあと5人で締め切ります。
(70)　―会議にはあと誰が来ますか？　―太郎で最後です。

(69)において，申し込みを「締め切る」は，申し込みを終了させる（または，申し込み人数が限界に達する），と解釈できる。X（5人）は，それによって申し込みが限界に達する人数と解釈できるという意味で，pを補完していると考えられる。(70)でも，Xは，「最後だ」という名詞述語を，それによって「（誰かが）会議に来る」という事態を終了させるタームとして補完していると考えられる。いずれも，Xが，何かを終わらせるきっかけであることが重要である。実際，pが終了・限界と解釈されることが難しい場合は「で」に制約が発生する。

---

22)　小矢野（1985）は，デ格名詞と形容詞の組み合わせとして，①「何かを満たす材料の結びつき」（ex. いっぱいだ，ぎっしりだ，満員だ，満席だ，満杯だ」と，②「原因の結びつき」を挙げ，①について，「デ格名詞は，形容詞の表す，何かが満たされている状態を作り出している内容物を表している」と指摘している。

23)　本稿では扱わないが，「割る」という動詞と「で」の共起も興味深い。「ウイスキーを水で割る」/「54を9で割る。」などの分析は伊藤（2006）を参照されたい。

24)　このケースは一見すると3.3.の「で」が「時間・時点」を表すケースと近い。しかし，3.3.のケースでは時間・時点を表すXがpの意味内容に拘わらず，pを「終点・限界」と定義するのに対して，ここではp自体が「終点・限界」をもともと表している点で両者は異なると考えられる。つまり，前者では，Xがpの意味内容とは独立してpを限界と定めるのである。

(71)　* 来場者は太郎で最初だ。

pの「補完」タームとしてのXは，終了が設定され，すでにある状態に達しているpがその終了点に達するため，「最初だ」のように，それによってはじめてpが構築される場合には使用できない[25]。

5.2.　pが「充足」を意味する

ここでは，「充足」を表す述語として，「足りる」と「いい」を扱う。

(72)　300円で足ります。

動詞「足りる」は，「必要なだけある。十分である。」ことを意味する（cf.『大辞林』）。「Xで」が加わると，どれだけあればあらかじめ設定された目標に達するかが示されることになる。したがって，XはpがXが表す目標を満たすタームと解釈される[26]。逆に，pを設定された目標として解釈できない場合は「で」は使えないということになる。次の例はそれを示している。

(73)　300円 {*で／φ}　{足りない／不足する}。
(74)　この論文には結論 {*で／が} 欠けている。

つまり，「足りない」「不足する」「欠ける」などの，結果として何かが欠如することを意味する動詞は，それ自体としては目標を表すとは考えにくく，「で」は使えないと考えられる[27]。

(75)　—何か飲む？　—コーヒーでいいよ。

形容詞「いい」は「適合性」を表す（Ito 2003）と定義できる。つまり，この例文は，X「コ

25)　この制約は，「で」の時間用法のそれと並行している。cf. ??「会議は5時で始まった。」vs「会議は5時で終わった。」ただし，「会議はあと5分で始まる」は可能である。それは「あと」が，会議開始時刻を，開始点ではなく，発話時点から見た終了点，つまり「会議が始まっていない時間の終了点」と捉え直すためであると考えられる。Xは「会議までの待ち時間」を終了させるための媒介となるタームである。

26)　日文研のリストの（7）「会場が人でいっぱいになる」（「内容物」）も，同様の分析が適用できると思われる。

27)　ただし，（73）において，「Xで」を「は」によって主題化すると可能になる。cf.「300円では足りない」。これは，「300円では足りない」は，「いくらならば足りるか」という疑問を喚起し，「十分である金額」を再設定することが可能になるためであると考えられる。

ーヒー」が「飲みたいもの」に適合しているということを意味すると考えられる。Xが「いい」を補完しているとすれば，「選ばれるべき飲みもの」が「コーヒー」によって決定されたということであろう。

5.3. pが「全体の構築」を意味する

最後にpが，様々な意味で，「全体の構築」を意味すると考えられるケースを見る。

(76) 委員会は5人で構成されている。
(77) 水は酸素と水素でできている。

(76)と(77)は，Yが構成体としての全体（それぞれ「委員会」，「水」）を表しており，Xはこの全体の構成のための媒介となる要素，つまり，全体の構成員・要素と解釈できる。つまり，XがpをXを補完しているとすれば，それは，Xが，Yの要素として，Yを構成体として成り立たせているということと考えられる[28]。

5.4. まとめ

以上，「で」の機能として，Xは，その意味に「完結性・充足性」を内包する動詞pを補完する，という仮説を立て，pの表す意味と補完要素Xの関係により3つのケースを区別した。すなわち，pが「限界」を表し，Xがその限界を確定する要素である場合（5.1.「範囲の上限」），pが「充足」を表し，Xがそれを満たす要素である場合（5.2.「内容物」），および，pが「全体の構築」を表し，Xがその要素・部分として解釈される場合（5.3.「構成要素」）である。

6. 結語

本稿では格助詞「で」の多義性を統一的に説明するための仮説として，「「で」はXを述語pによって表される事象の実現を媒介するタームであるとマークする」を提出し，それに基づいて様々な意味がどのように構築されるのかを明らかにしようとした。また，XとpのXの関係づけの違いにより，「で」に3つのケースが認められることを示した。

本稿のより一般的な主張として，文脈から切り離された語彙アイテムの意味（深層格など）は，言語以前に存在する認知カテゴリーに基づく概念（原因や道具など）にすぎず，語彙アイテムの意味は，発話の中での文脈との相互作用を通じて構築されるものであることを示した。

---

28) 『大辞林』は，「完結」の意味として，「終わること」に加えて，「それ自体まとまったものとして存在できていること」を挙げている。

本稿が提案する格助詞という微小なアイテムの意味論的分析は，あらゆる言語アイテムの，とりわけ多義語の，発話の中での意味構築のメカニズムを理解する道を開くことを志向するものである。

参考文献

石綿敏雄（1999）:『現代言語理論と格』，ひつじ書房.

伊藤達也（2006）:「量を表す目的語を伴う仏語 *couper* と日本語ワル，キルの意味論的考察」，『名古屋外国語大学紀要』，30 号，名古屋外国語大学外国語学部，pp. 83-106.

小矢野哲夫（1985）:「形容詞のとる格」，『日本語学』第 4 巻第 3 号，明治書院.

http://www001.upp.so-net.ne.jp/ketoba/keiyoushinotorukaku.htm

城田俊（1993）:「文法格と副詞格」，仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』，くろしお出版. pp. 67-94.

菅井三実（1997）:「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」，『名古屋大学文学部研究論集』，127，pp. 23-40.

菅井三実（2000）:「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」，『兵庫教育大学研究紀要』，20，pp. 13-24.

菅井三実（2004）:「格の体系的意味分析と分節機能」，『認知言語学論考』，4，ひつじ書房，pp. 95-131.

菅井三実（2008）:「現代日本語の格体系から見た原因 NP の格標示について」，『言語表現研究』，24，兵庫教育大学言語表現学会，pp. 13-21.

宗田安巳（1992）:「原因・理由の「で」と「に」の格らしさについて」，『日本語・日本文化』，18，大阪外国語大学研究留学生別科編，pp. 67-86.

宗田安巳（2006）:「「で」の「格解釈のゆれ」再考―「道具」と「原因・理由」を中心に―」，上田功・野田尚史編『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』，大学書林，pp. 323-333.

田中茂範・松本曜（1997）:『空間と移動の表現』，研究社出版，pp. 35-49.

寺村秀夫（1982）:『日本語のシンタクスと意味 I』，くろしお出版.

日本語記述文法研究会（編）（2009）:『現代日本語文法 2』，くろしお出版.

盤若洋子（2015）:『格助詞「で」の研究―深層格と包括的意味機能―』，拓殖大学大学院言語教育研究科言語教育学専攻，博士論文.

益岡隆志・田窪行則（1992）:『基礎日本語文法―改訂版―』，くろしお出版.

間淵洋子（2000）:「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」，『国語学』，51，国語学会，pp. 15-30.

村上佳恵（2010）:「感情動詞の補語についての一考察―「ニ」と「デ」について―」，『学習院大学国語国文学会誌』，53，pp. 14-29.

森山新（2008）:『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』，ひつじ書房.

森田良行（1989）:『基礎日本語辞典』，角川書店.

山田敏弘（2003）:「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」，『岐阜大学国語国文学』，30，pp. 13-23.

Ashino, F., Franckel, J.-J. & D. Paillard (2017): *Prépositions et rection verbale. Étude des prépositions* avec, contre, en, par, parmi, pour, Bruxelles : Peter Lang.

Culioli, A. (1990) (1999) (2018): *Pour une linguistique de l'énonciation,* Tomes I-IV, Ophrys, Lambert-Lucas.

Dhorne, F. (1984): « Différenciation, identification. La particule – NI – en japonais », *Recherches en linguistique japonaise*, Collection ERA 642, Université Paris VII, pp. 71-105.

Ito, T. (2003): *Interactions en jeu dans la variation sémantique des unités morpho-lexicales. Deux études de cas :*

l'adjectif bon *en français et la réduplication en japonais*, Thèse de Doctorat, Université de Paris X – Nanterre.

Shimamori, R. (1991): *Des particules japonaises*, Tokyo : Taishuukan.

Terada, A. (1993): « *No*, *de* et *node* ou la (re)construction de la suite (chrono) logique », *Faits de langues* 1, pp. 137–140.

Terada, A. (2001): « Particules (*zyosi*) japonaises », *Faits de langues*, 17, pp. 247–261.

Terada, A. (2001): « La particule *ni* en japonais », *Faits de langues*, 17, pp. 253–261.

Victorri, B. (1999): « Le sens grammatical », *Langages*, 136, Larousse, Paris, pp. 85–105.